太宰府人物志

資料室だより⑲

「菅公の裔」徳富蘇峰

徳富蘇峰は、文久3（1863）年、肥後藩の郷士徳富家の長男として生まれます。蘇峰は号、名は猪一郎。5歳下の弟に小説家徳富蘆花がいます。早くから言論人として身を立てた蘇峰は、明治・大正・昭和の三時代にわたって常に世論の第一線にあろうとし、また昭和32（1957）年94歳で没するまでに約300冊の著作を世に送りました。彼の仕事は主にジャーナリズム・社会評論・歴史叙述に大別できますが、中でも100巻に及ぶ超大作『近世日本国民史』は歴史家としての大業です。蘇峰は生前何度か太宰府を訪れていますが、その内の一度は『国民史』執筆のための調査としてで、昭和5（1930）年3月22日に水城・都府楼跡・観世音寺・太宰府天満宮を訪問しています。

『近世日本国民史』は大正7（1918）年7月から国民新聞で連載を開始します。当時蘇峰は55歳。途中他紙に引き継がれながらも27年間連載は続きます。ところが敗戦により蘇峰の言論活動は糾弾され、A級戦犯容疑者となります。持病もあり『国民史』の執筆は中断、占領の終わる昭和26（1951）年にようやく執筆を再開し、翌年4月に第100巻を脱稿。折しもこの年は太宰府では天満宮の御神忌千五十年大祭の年。89歳の蘇峰は脱稿の翌月17日に太宰府天満宮を訪れました。この訪問で、彼は一千年祭の時に奉納された『余香帖』の中にある39歳当時の自筆の書と50年ぶりに再会、往時をしのびます。書をしたためた明治35（1902）年当時、懇意にしていた桂太郎は首相の座にあり、蘇峰は日本政治の中心の最も近くにいました。

ところで、蘇峰は生涯多くの号を用いており、その中のひとつに「菅正敬」があります。太宰府天満宮境内には彼の詩を刻んだ「菅公頌徳碑」がありますが、それには「昭和二十九歳　蘇峯菅原正敬頽齢九十二」と見えます。最晩年の蘇峰は自分を菅原道真の末裔と考えていたようで、27歳で宮司に就任したばかりの故西高辻信貞前宮司が昭和23（1948）年5月、熱海伊豆山の晩晴草堂に蟄居中であった85歳の蘇峰を訪問した際に、そのことを前宮司に語っています。

実は、蘇峰は昭和10（1935）年72歳で出版した『蘇峰自伝』の中で「予が家は菅原氏にして、菅公の裔と申伝えてゐるが、それは固より当てにならない」と述べています。彼がなぜ、かつて疑っていた菅公末裔説を後になって採用したのかは詳らかではありませんが、晩年に己の生涯を顧み、道真との浅からぬ因縁を感じたのかもしれません。

市史資料室　藤田理子